

■ 1月27日：アウシュヴィッツ解放60周年記念

●エベネゼル、「ホロコースト生存者の会」 ●レマン・ツィオン ●「ハノーファー駅」●ドキュメンタリー・フィルム

暖冬が続いていたドイツも一週間ほど前から雪が降り始めました。今週に入ってから雨の毎日です。

今日は、この場をお借りして、クリスマス・カードや年賀状、あるいはご意見等のメールをくださったおひとりおひとりに返事をお出しできていないことを心よりお詫び申し上げます。時間的に、どうしてもお返事を書く余裕がありません。でも、皆さんのお便り、ひとつひとつ大切に読ませていただいています。ほんとうにありがとうございます！

今日は、とても長いメルマガになってしまいましたので、どうぞお時間のある時に、じっくりお読みいただければと思います。

■ 1月27日：アウシュヴィッツ解放60周年記念

日本でも報道されたことと思いますが、去る1月27日は、アウシュヴィッツ解放記念日でした。ドイツは、1996年、この日を「ナチズムによる犠牲者追悼日」(Gedenktag fuer die Opfer des Nationalsozialismus)と決めました。

●エベネゼル、「ホロコースト生存者の会」

この日、エベネゼル緊急基金ドイツ支部(ハンブルク)では、ハンブルク在住のホロコースト生存者を招待し、懇親会を開きました。「ハンブルク・ホロコースト生存者の会」には、実際40名ほどの生存者が登録されています。この会の存在を、ハンブルク・エベネゼルは昨年9月まで知りませんでした。法人として役所に登録されていなかったことに加えて、彼らは、仲間以外の誰にも自分たちがユダヤ人であることを告げずにひっそりと暮らしていたからです。

彼らのほとんどはウクライナからの移民です。イスラエルに移住したかったけれど、ユダヤ的な教育を全く受けていなかったのがイスラエルに行くのを躊躇した人たちだったり、ドイツの方が保証がきちんとしているからとの理由でドイツに来た人たちでした。収容所で生まれたか、子供時代を収容所で過ごした世代の人たちで、ほとんどシャバット(安息日)を守ったこともありません。

彼らの多くは90年代に入ってからドイツに移住してきましたが、半数はドイツ語をほとんど話せません。女性は今だにロシア・スカーフをかぶっています。

懇親会は14時～17時に及び、ヒンリッヒとエルケ(エベネゼルのドイツ支部リーダーのご夫妻)は、聖書に記されている神の民への約束を伝え、そして、私たちクリスチャンの救いと祝福は、ユダヤにその根があることをはっきりと語りました。そして、ドイツとクリスチャンの犯した罪を、みな頭を垂れて心から謝罪しました。

●レマン・ツィオン

この後、私は、Lemaan Ziyon(シオンのために黙っていない)を賛美しました。これも不思議な導きです。謝罪の後、エルケがイザヤ62章を読み始めました。そして打ち合わせをしたわけでもないのに、「それではAtsukoがLemaan Ziyonを歌います。」と私に引き渡したのです。実は私は、前の日からこの歌を歌おうと思っていたのです。不思議な主の導きです。



シオンのために、わたしは黙っていない。
エルサレムのために、黙りこまない。
その義が朝日のように光りを放ち、
その救いが、たいまつのように燃えるまでは。
(イザヤ62:1)

それから生存者の皆さんに、「多くの日本人クリスチャンがユダヤ人のために祈っています。」とお伝えしました。皆さんは、「はるか遠い国の日本人が！？」と驚き、たいへん喜んでくださいました。そして、エベネゼルの日本支部がロシアに近い北海道の札幌にあることを言いますと、ひとりの男性が、「私は北海道のすぐそばの、サハリン出身です。」と言いました。北海道の最北端の宗谷岬とサハリンのクリリオン岬は、わずか50Km 程度ほどの距離です。添付した写真が、そのサハリン出身のホロコースト生存者、グルーバー氏です。

会の終わりには、生存者の皆さんもすっかりうちとけてくださいました。ひとりの方は、こうおっしゃいました。「私はドイツ人には、自分がユダヤ人であることを決して明かしたくありませんでした。でも今日、初めて、自分が自分でいられる解放感を味わうことができました！」もうひとりもこうおっしゃいました。「私たちは、これまでドイツ人に招待を受けたことが一度もありません。今日が初めて招待を受けた日です。」

生存者の皆さんに今一番必要なのは慰めです。「慰めよ、慰めよ、私の民を。」と主がおっしゃっている通りです。

ひとりひとりが辿ってきた生涯は、やはり壮絶なものです。今回は2人の生存者だけが話しをしましたが、エルケは、ひとりひとりにインタビューしてレポートを作成すると言っています。それが出来上がったら、私も抜粋して日本語に訳させていただきます。

●「ハノーファー駅」



その後、市庁舎の大広間(添付の写真)で「ハノーファー駅」というオラトリオの公演があったので、聞きに行ってきました。ハンブルク市長、元ロシア軍司令官なども来ていました。ハンブルクから電車で2時間南下したところにあるハノーファー駅は、ドイツのユダヤ人をテレジエン・シュタットやアウシュヴィッツ、マイダネクへ運ぶ分岐点だったのです。公演では、1941年~1945年までのその様子を、二人の歌手、ヴァイオリン、サクソフォンによる挿入音楽とともに、2人の朗読者が語ってゆきました。

途中、朗読者のひとりが声をつまらせ、深くため息をついたきり、話せなくなるシーンがありました。音楽家たちがそれを察して演奏を始めました。その間、となりの朗読者が彼にすばやくティッシュを渡しました。音楽が終わったときには、彼は落ちついて再び話せるようになっていました。

したが、聞いていた私たちも、ほんとうに彼と同じ思いでした。

●ドキュメンタリー・フィルム

先週は、アウシュヴィッツ解放60周年記念ということで、テレビはどこのチャンネルでもホロコースト映画やドキュメンタリーフィルムなどを放映しました。私も珍しく毎夜テレビに釘付けになりました。生存者、元 SS、元ロシア軍司令官など、60年目にして初めて口を開き始めた人々へのインタビュー番組もたくさんありました。

(スペシャルコマンド)

中でもガス室で働かされたスペシャルコマンド(Sonderkommando)の証言が重く心に残りました。スペシャルコマンドとは、SS(ナチス)のために働くよう命じられたユダヤ囚人です。彼らは、ガス室に入る同胞の服をむりやり脱がせ、ガス室に入れなければなりません。暗殺に使われた「チクロン B」という毒ガスは、吸うと体全体に激しい痛みが生じ、血管が破裂して、皮膚からも血が噴き出すのだそうです。人々は10~12分の壮絶な苦しみした後、絶命します。互いにくっついてしまった死体を離し、外に運び出し、それから焼却炉に運びます。その後ガス室を次のグループが入るまでに清掃しなければなりません……

多くのスペシャルコマンドは、その仕事に耐えきれず、SS 司令官に背いて殺されるか、高圧電線に身を委ねて自殺しました。今も生き残っているガス室のスペシャルコマンドは、全世界にわずか8人。テレビで証言した3人は、60年経って初めて口を開き始めたのです。今も同胞のユダヤ人社会に入ることを躊躇し、苦しみを分かち合える人も無く、毎夜ガス室の悪夢にうなされるスペシャルコマンドの証言に、その苦しみの重さが、私の内にも数日続きました。

「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼への打ち傷によって、私たちはいやされた。」(イザヤ53:5)

あのスペシャルコマンドたちの苦しみを癒すために、キリストが受けられた打ち傷の痛みは、どれほどの大きさだったことでしょう！キリストに、彼らが一日も早くお出合い出来ることを祈る毎日です。

大変だった税金申告と、夜なべしてドキュメンタリー・フィルムを見る週も終わり、今週から規則正しい生活に戻りました。朝は祈りとみことばの学び、午後と夜は歌の練習や原稿書きとその準備、採譜、移調などに忙しくしています。どうぞこちらでの生活が充実し、祝されますようお祈りください。

主の守りと平安が、日々皆様と共にありますように！

シャローム！

工藤篤子